OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第2章　日本定住ビルマ／ミャンマー人2世および1.5世のアイデンティティ形成 ： 「出自へのこだわり」と「日本への親近感」に着目した世代間比較
Author(s)	梶村, 美紀
Citation	阪大ふくふくセンター 研究・実践シリーズ 1　日本のなかの東南アジア ： 移民第2世代に注目して. 2026, p. 27-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104098
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第２章　日本定住ビルマ／ミャンマー人２世および 1.5 世のアイデンティティ形成 ――「出自へのこだわり」と「日本への親近感」に着目した世代間比較

梶村　美紀

I.　はじめに

日本に中長期間滞在しているビルマ／ミャンマー出身者[(1)]（以後，ミャンマー人ないし定住ミャンマー人と表記）の数は近年急速に増加し，その在留形態も多様化している。これにはミャンマー国内の政治的・経済的要因が大きく影響している。特に 1988 年の民主化運動の封じ込めと軍事政権の成立，1990 年代以降の経済改革に伴う出稼ぎ奨励などが，国外流出の大きな要因となっている［梶村 2014］。また近年では，2021 年の軍事クーデタによる治安および経済の悪化や 2024 年の徴兵制度の導入などが，国外流出の要因として挙げられる。その結果，移住時期，在留資格，言語，宗教，家族構成などにおいて多様性を内包するコミュニティが形成されている。

筆者はこれまでの研究において「ビルマ系日本人」という概念が誕生する可能性を提示し［梶村 2018a］，滞在の長期化に伴い，すでにその萌芽が確認できることを指摘した［梶村 2020］。近年，日本社会では「○○系日本人」という複合的な自己分類に関する議論が広がりつつあり［駒井 2016］，筆者もまた，それを外部からの一方的な「名付け」ではなく，当事者が主体的に選び取る「名乗り」として捉える視点の重要性に留意してきた［梶村 2020］。本稿では，こうした問題意識を継承しながら，特に定住ミャンマー人 2 世および 1.5 世に焦点を当て，当事者が出自とどう向き合い，自らをいかに位置づけ再解釈しているのかを明らかにする。これは，日本における移民の定住プロセスを理解する上で重要な課題である。

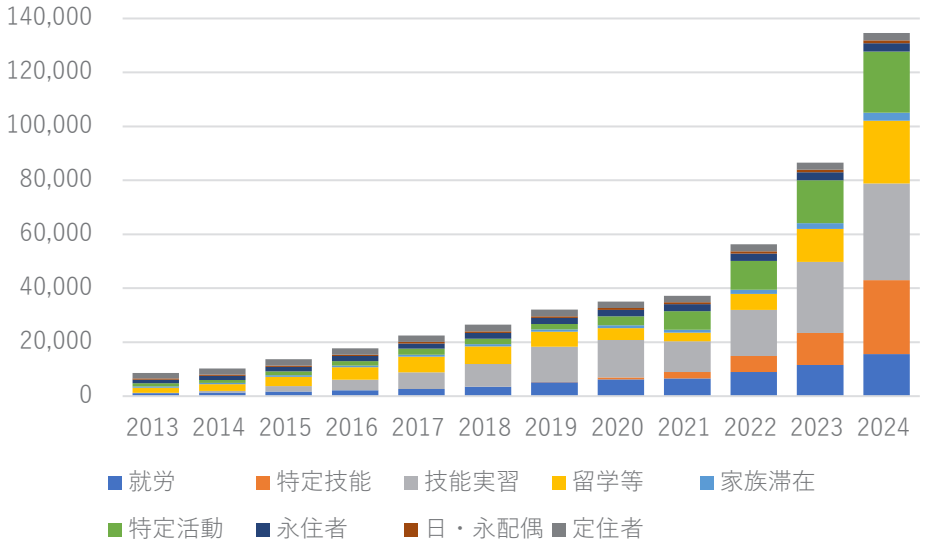


図 1　2013-2024 在留ミャンマー人数推移（単位：人）

出典：在留外国人統計（https://www.e-stat.go.jp/stat-search/?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20240&month=12040606&tclass1=000001060399&tclass2val=0.）より筆者作成。

II.　これまでの研究成果

移民 2 世のアイデンティティ研究では，ジョン・W・ベリー（John W. Berry）が提示した「文化変容理論（Acculturation Theory）」が広く参照されてきた［Berry 1997］。ベリーは，「出身国文化の維持」と「ホスト社会への関与」の 2 軸から，同化（Assimilation），統合（Integration），分離（Separation ／ Segregation），周辺化（Marginalization）の 4 類型を提示している。

日本の移民研究においても，この理論は，多様なエスニック・アイデンティティのあり方を捉える枠組みとして用いられてきた。たとえば清水ほか［2021］は，多様化する移民第 2 世代について，同化，統合，分離，周辺化の 4 つの志向を「出身国文化の獲得程度およびそれへの帰属感」と「ホスト国文化の獲得程度およびそれへの帰属感」という 2 軸から整理している。

さらに，佐々木は，日本国籍を取得したコリア系日本人の研究において，福島安則が提示した「民族志向」「同化志向」「共生志向」「個人志向」の 4 類型を参照し，「出自へのこだわり」と「日本人への一体化」という 2 軸から「後天的民族志向」「必然的・意識的同化志向」「個人的共生志向」「無帰属的個人志向」という分析枠組みを提示した［佐々木

2006］。これは，日本社会におけるエスニック・マイノリティが「どのように日本社会と関わり，いかに自らの出自を位置付けるのか」という点を多面的に捉えたものである。

筆者は，これらの理論的系譜を踏まえ，日本定住ビルマ人 1 世を対象としたインタビュー調査を実施してきた［梶村 2018b，2020］。初期の考察［梶村 2018b］では，1 世が日本国籍を取得していないにもかかわらず，長期の生活基盤と強い日本への親近感から自らを日本人と捉えるアイデンティティを持ちうる点，また，日本とのつながりを肯定的に捉えているにもかかわらず，日本に所属しているという実感を持てずに「無国籍者」や「地球人」と自己規定する事例など，複雑なアイデンティティのあり方を明らかにした。この研究を深化させた梶村［2020］では，佐々木［2006］を参考に，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」という 2 軸を用いて，以下の 4 類型を提示した。

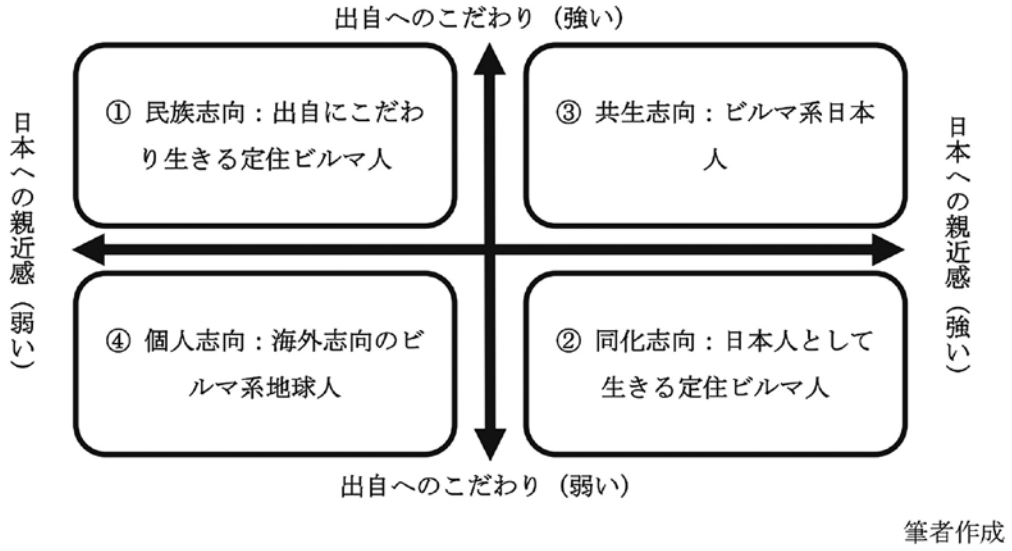


図 2　1 世アイデンティティ類型

出典：［梶村 2020: 23］

調査の結果，「民族志向」，「個人志向」，「共生志向」の 3 グループは，独立後のビルマ情勢の影響をうけ，やむを得ず来日した経緯を共有していた。一方，「同化志向」グループは，差別的な環境から逃れ新たな生活を求め来日した点が他の 3 グループと異なる特徴を示した。この分析を通じて，共生志向の文脈において「ビルマ系日本人」という新たな自己認識の萌芽が確認されたが，これは当事者からの名乗りではなく，筆者による分析的な名付けであった点を明記しておきたい。

この研究は 1 世を主な対象としていたが，例外的に 1.5 世の事例が 1 名含まれていた。

この 1.5 世の語りにおいても，1 世と同様に自らを「地球人」と捉える「個人志向」のアイデンティティがみられた。これらの知見は，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」という 2 軸だけでは捉えきれない，世代を超えて連続する複雑で流動的なアイデンティティのあり方を浮き彫りにしている。

先述の通り，現在では定住ミャンマー人の世代構成は多様化し，1.5 世，2 世，さらには 3 世も誕生しているが，管見の限りこれら後続世代に焦点を当てた研究は限られている。筆者のこれまでの研究における「ビルマ系日本人」は，2 つのアイデンティティを統合する類型として提示した分析概念であり，筆者が名付けたものであった。それに対し，本稿で実施したアンケート調査では，程度の差はあるものの，異なる世代の回答者が自ら「ミャンマー系日本人」という複合的なカテゴリーを選択している。この自己認識の変化は，アイデンティティ研究において重要な論点である「名付け」から「名乗り」への移行を示唆する。

本稿では，先行研究で用いた「出自へのこだわり」と「日本への親近感」という 2 軸を継承・発展させ，2 世および 1.5 世のアイデンティティ形成の特徴を明らかにする。さらに 1 世との比較を通じて，世代間の連続性と変容を分析し，「ビルマ系日本人」概念の深化を試みる。なお，本稿で用いるアイデンティティ（identity）とは，「自分が何者であるか」に対する自己認識として捉える。これらの理論的枠組みを踏まえ，1 世のアイデンティティ類型（民族志向・同化志向・共生志向・個人志向）を起点として，2 世および 1.5 世の分析を行うことで，世代を超えたアイデンティティ形成の動態を検討する。

III. 研究方法

本稿では，筆者の研究［梶村 2020］で提示した 1 世の 4 類型を援用し，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」の 2 つの軸を継承しながら，これらの軸が 2 世および 1.5 世のアイデンティティ形成にどのように現れているのかを，1 世との世代間比較を通じて明らかにする。具体的には，以下 2 点を明らかにする。

1. アンケート結果および一部のインタビュー結果をもとに，2 世および 1.5 世の「言語能力」，「文化的特徴」，「自己認識」，「社会的な経験」の観点から，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」の表れ方を分析する。
2. 上記の分析結果を先行研究で得られた 1 世のデータと照合し，世代間の共通点及び変容の傾向を検討する。その上で，「ビルマ系日本人」概念の萌芽が，2 世および 1.5 世

の複合的かつ柔軟なアイデンティティ形成を経て，「ミャンマー系日本人」へと変容する過程を明らかにする。

調査は2024年9月から2025年2月にかけて実施した。対象者の選定にあたっては，筆者がアクセス可能なネットワークが主に1世に偏っているという制約があったため，本調査ではスノーボール・サンプリングを用いて協力を得た。調査対象者は1世から2世までの17名で，内訳は1世5名，1.5世4名，2世8名である。本稿では，2世とは「日本生まれ，日本育ちで，日本での生活が主となる人」，1.5世とは「幼少期から青年期にかけて来日した人」，1世を「成人後に仕事や学業等のために来日した人」と定義する。

アンケート調査はGoogle Formを用い，2024年9月から2025年2月にかけて実施し，合計17名から回答を得た。質問項目は，「基本情報」，「言語能力」，「文化的特徴」，「自己認識」，「社会的な経験」の5領域で構成される。収集したデータは領域ごとに整理し，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」の2軸を用いて，その強弱からアイデンティティ形成のあり方を考察した。

また，アンケート回答者のうち1世1名，1.5世3名，2世2名に対しては，後日，半構造化インタビューを実施した。インタビューの詳細な分析は別稿で論じる予定であるが，本稿ではアンケート分析の結果を裏付け，世代間の特徴を質的に明らかにする具体的な論拠として，インタビューデータの一部を引用する。

調査対象者は全て仮名で示し，個人が特定されるおそれのある情報は省略した。サンプル数には限りがあるが，本稿を通じて，定住ミャンマー人のアイデンティティ形成の多様性を明らかにする。

表1　調査対象査一覧表

仮名	世代	国籍または在留資格	出生年代	出生地
A	2世	定住者	2000	日本
B	1.5世	永住者	2010	日本
C	2世	学生	2010	日本
D	2世	定住者	2000	日本
E	1.5世	日本	1990	回答なし
F	2世	日本	2000	日本
G	1.5世	日本	1970	ミャンマー

H	2 世	日本	2000	日本
I	1 世	永住者	1980	ミャンマー
J	1 世	回答なし	1970	回答なし
K	2 世	日本	2000	日本
L	1.5 世	永住者	2000	ミャンマー
M	2 世	回答なし	2010	日本
N	1 世	日本	1970	ミャンマー
O	1 世	日本	1950	ミャンマー
P	1 世	技術・人文	1990	ミャンマー
Q	2 世	日本	2010	日本

筆者作成（アンケート調査結果より）

IV. アンケート調査：「出自へのこだわり」と「日本への親近感」からみる 2 世および 1.5 世の特徴

本節では，2024 年 9 月から 2025 年 2 月にかけて実施したアンケート調査のうち，2 世 8 名および 1.5 世 4 名，計 12 名の回答について，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」の 2 軸を用いて分析する。これらは互いに独立した固定的属性ではなく，言語能力，文化的実践，自己認識，社会経験などが重なり合いながら構成される多層的なプロセスとして捉えられる。

日本生まれで日本の学校教育を受けた 2 世は，日本語を第一言語として日本社会を生活基盤とする。一方，1.5 世は幼少期をミャンマーで過ごし，来日時期は 12 〜 17 歳と比較的高い。そのため，両世代は「日本への親近感」を共有しつつも，「出自へのこだわり」の表れ方に違いがあると予想される。本節では，1. 言語能力，2. 文化的特徴，3. 自己認識及び社会経験の 3 点から，両世代の特徴を検討する。

1. 言語能力の特徴

言語能力は，アクセスしうる文化圏やコミュニティの範囲を規定すると同時に，「出自へのこだわり」を支える基盤である。本項では，日本語・ミャンマー語・民族語・第三言語の 4 点から両世代を比較する。

(1) 日本語能力と日本への親近感

2世（8名）と1.5世（4名）はいずれも，日本語を主要な生活言語として用いている。日本語能力については両世代のほとんどが，「流暢」または「複雑な内容でもできる」と回答し（12名中11名），日本語が日常生活の基盤となっていることが確認された。この高い日本語能力は，両世代に共通する「日本への親近感」の土台となっている。

他方，家庭内での日本語使用率には世代差がみられた。2世は全員が家庭内でも日本語を主に使用し，日本語が生活全般を貫く機能的な第一言語となっている。1.5世は幼少期にミャンマー語を使用する環境で過ごした影響から，多くが日本語とミャンマー語を併用している（4名中3名）。1.5世は日本語能力が安定している一方で，習得言語であるために，日常生活で「日本語が上手ですね」と言われることが多い。つまり，日本滞在歴が長いにも関わらず常に「外国人」としての線引きを意識させられる経験を有している。

(2) ミャンマー語能力と国民国家レベルの出自

ミャンマー語は国民国家としてのミャンマーを象徴する言語であり，親世代とのコミュニケーションや故地とのつながりを支える。本稿では，ミャンマー語能力を「ミャンマーという国民国家への帰属意識」や「国民としての出自へのこだわり」を測る指標の1つとする。アンケート結果からは，2世と1.5世の間に明瞭な差異がみられた。2世（8名）にはミャンマー語能力について，「流暢」との回答は無く，多くがミャンマー語を「日常会話レベル」またはそれ以下と回答した（8名中6名）。特に読み書きについてはほぼ全員が困難を抱えている。日本語が圧倒的に優位な環境で成長し，公的な場でミャンマー語を学ぶ機会も限られるなかで，ミャンマー語を維持することは構造的に難しい。

これに対し，1.5世の多くはミャンマー国内での学校教育を経験しており，多くがミャンマー語能力について「流暢」または「複雑な内容でもできる」と回答し（4名中3名），読み書き能力も1名を除き高く維持されている。1.5世はミャンマー語を通じて国民国家レベルの出自意識を強く保持している世代であるが，2世にとってミャンマー語の継承は最も困難な課題の1つとなっている。この世代差は，「出自へのこだわり」が言語を主要な基盤とする形から，より多様な文化実践へと移行していく過程を示唆する。

(3) 民族語能力とエスニックレベルの出自

ミャンマーには政府の公式見解では135の民族グループが存在するとされ，ミャンマー語とは別に民族語が使用される場合がある。民族語は，国民国家としてのミャンマーへの帰属というよりも，特定の民族コミュニティや家族単位の出自への帰属意識を示す指標と

して位置付けられる。

アンケートの結果，民族語能力がミャンマー語を上回る 2 世が 3 名確認できた（表 2）。具体的には，ミャンマー語については「全くできない」が民族語は「日常レベル」で話せる D や，ミャンマー語は「日常レベル」だが民族語は「複雑な内容でもできる」H など，高度な習熟度を示す。これらの事例は，国語であるミャンマー語の継承が不十分であっても，家庭内での実践を通じてエスニックレベルの出自が維持されうることを示している。

表 2　2 世の言語能力

仮名	ミャンマー語	民族語	比較
D	全くできない	日常レベル	民族語が優位
F	簡単な内容	日常レベル	民族語が優位
H	日常レベル	複雑な内容	民族語が高水準

筆者作成（アンケート調査結果より）

2 世においては，出自へのこだわりが国家レベルから，よりローカルな「民族コミュニティ」のレベルで再構成される傾向が読み取れる。ただし，本調査の対象者数は限られており，一般化には慎重さが必要である。

(4) 第三言語と地域・トランスナショナルな視野

日本語・ミャンマー語・民族語以外にも，英語や中国語，タイ語等の第三言語を学習する者も複数みられた。なかでも，中国語やタイ語のようにミャンマー近隣国の言語を学ぶ 2 世が確認でき，こうした言語選択は注目に値する。これらの第三言語は，「日本」と「出身国」という二国間フレームを超え，東南アジアや東アジアという地域的な広がりの中で自己を位置づける可能性が見出せる。多言語能力は，トランスナショナルな視野を支える資源として，両世代のアイデンティティ形成に寄与している。

以上から，2 世と 1.5 世はいずれも高い日本語能力を共有しつつも，「出自へのこだわり」の言語的基盤は世代によって異なることがわかる。2 世では母国語としてのミャンマー語の継承が難しい一方で，民族語や第三言語を通じたローカルかつ地域的な出自意識の再構築がみられ，1.5 世では国民国家レベルの出自を支える高いミャンマー語能力が維持されている。

2.　文化的特徴

本項では，日常生活における文化的実践と意識を通じて，「日本への親近感」と「出自へ

のこだわり」がどのように交錯しているのかを検討する。ここでいう「出自へのこだわり」は，ミャンマー国民としての文化だけでなく，特定民族に固有の文化的特徴も含む。

(1) 日本文化への親近感と日常生活

日本文化への親近感は，2世および1.5世のいずれの世代においても非常に高い。質問では，日本文化に対する親近感を5段階で尋ねている。2世の8名中6名が「非常に感じる」または「多少感じる」と回答した一方で，残る2名は親近感が低い回答を示し，2世の中のばらつきが確認できた。これに対し，1.5世では4名全員が日本文化に対して「非常に感じる」または「多少感じる」と回答している。

これらの回答からは，食習慣，娯楽，生活リズムなど，日常生活の多くが日本文化の枠組みの中で営まれていることが確認できる。前項で確認した日本語能力の高さと合わせると，日本文化への親近感は両世代に共通する安定した基盤として機能しているといえる。ただし，2世の一部には親近感が低いという回答もあり，日本文化への適応が必ずしも一様ではないことが示唆される。

(2) ミャンマー文化・民族文化への志向

アンケートの結果を見ると，2世においては，日本文化とミャンマー文化をともに強く肯定する「共生志向」と，日本文化への親近感は保ちながらもミャンマー文化への情緒的傾倒を強めるパターンが併存していた。さらに2世の半数（8名中4名：A，D，H，K）が民族意識について「多少感じる」と回答していることから，国民国家としてのミャンマー文化への意識が必ずしも強くない一方で，家族やコミュニティ単位で経験される民族文化が，2世の「出自へのこだわり」を支えていることが確認できる。これらの民族文化への親近感は，言語や儀礼を通じた直接的な継承だけではなく，親の宗教行事への参加やコミュニティにおける間接的，習慣的な接触を通じて形成されたものも多いと考えられる。

1.5世は，ミャンマーと日本での生活経験を有しているため，文化への親近感の組み合わせが多様である。日本･ミャンマー･特定民族のすべてに強い親近感を抱く回答がある一方，ミャンマー文化や民族文化への親近感が限定的で，日本文化への志向が優位なケースも存在した。1.5世の民族文化に対する意識について，1人は「非常に感じる」と回答し，もう1人は「全く感じない」と強い拒否感を示すなど，個人の出自認識の深さによって二極化する傾向がみられた。

以上の点から，ミャンマー文化・民族文化への志向のあり方は，世代や個人によって多様であり，出自へのこだわりが，国民的なミャンマー文化だけでなく，民族コミュニティ

というよりローカルなレベルで保持される傾向が，特に 2 世において見出せる。

(3) 宗教観と価値観の再構築

宗教観はミャンマー文化の中核に位置づけられるが，その受け止め方にも世代差がみられる。2 世では，宗教を多文化理解や自己内省の契機として捉える記述があった。ある回答者は，自身が複数の文化や信仰に触れてきた経験から，「育ってきた文化を相対化し，さまざまな文化を理解しようとすることが大切だ」と述べている。また，日曜礼拝など家族の宗教的実践を通じて出自とのつながりを保つ回答も確認できた。ここでは，宗教が家族関係や文化的ルーツを支える生活習慣として機能している。

1.5 世では，母国の政治や社会情勢との葛藤を通じて，伝統的な宗教観を内省的に再構築する姿がみられた。ある回答者は，現在のミャンマーの深刻な状況を前に「『良い行いをすれば良いことがある』という仏教の教えが信じ難くなってきている」と語り，伝統的な教義と過酷な現実とのギャップに揺らぐ様子を示した。他方で，「親代々の仏教」として宗教を継承しつつ，信仰内容そのものについては「よく分からない」と述べる回答もあり，自身が実践するのではないが，宗教が「家族の連続性を維持する慣習」として保持されるケースも存在する。

以上より，両世代とも日本文化への親近感を共通基盤としながら，「出自へのこだわり」はミャンマー文化と民族文化の間で多様に分岐していることがわかる。2 世では家族単位の文化実践や宗教を通じてルーツが再確認され，1.5 世では母国の現実と向き合うなかで個々の宗教観や価値観が内省的に再構築される傾向がみられた。

3. 自己認識および社会的経験：複合的アイデンティティと外部からの名付け

本節では，2 世および 1.5 世が日本社会において一般的に用いられる「日本人／外国人」という二分的な分類とどのように向き合い，自己を位置付けているのかを検討する。

(1) 2 世の自己認識

2 世の自己認識では，「日本人」「ミャンマー人」「ミャンマー系日本人」といった複数のカテゴリーを併せ持つ多層性が特徴的である。

表3　2世の自己認識

仮名	日本人	ビルマ人	ミャンマー人	特定の民族	ミャンマー系日本人
A	多少感じる	多少感じる	非常に感じる	全く感じない	非常に感じる
C	非常に感じる	非常に感じる	非常に感じる	あまり感じない	あまり感じない
D	どちらとも	全く	あまり感じない	多少感じる	多少感じる
F	回答なし	回答なし	回答なし	回答なし	回答なし
H	どちらとも	どちらとも	非常に感じる	非常に感じる	非常に感じる
K	非常に感じる	どちらとも	非常に感じる	多少感じる	全く感じない
M	非常に感じる	あまり感じない	多少感じる	回答なし	非常に感じる
Q	非常に感じる	どちらとも	多少感じる	回答なし	どちらとも

※表中の「どちらとも」はアンケート設問における「どちらとも言えない」を指す。

筆者作成（アンケート調査結果より）

表3に示す通り，2世8名のうち3名（A, H, M）が「ミャンマー系日本人」というカテゴリーを「非常に感じる」と回答し，Dも「多少感じる」と回答している。Aは後日実施したインタビューで，「ミャンマー系日本人」を非常に感じると回答した理由について「一番しっくりきた」と語っている[(2)]。この自己規定は，日本の生活基盤とミャンマーの出自を統合し，「日本人」か「ミャンマー人」かという二者択一の選択の枠組みに収まらない能動的な自己規定と捉えられる。

一方で，Kのように「日本人」と「ミャンマー人」の双方を「非常に感じる」としつつも，「ミャンマー系日本人」という折衷的な名称については「全く感じない」と明確に拒否する例もある。このように2世のなかには，複合的アイデンティティを表す名称を積極的に受容する態度と，あえて選択しないという態度が併存し，自己認識のあり方が一様ではないことが確認できる。

(2) 1.5世の自己認識

1.5世4名の自己認識も，表4が示すように，来日時期やミャンマーでの原体験の有無によって一様ではない。

表 4　1.5 世の自己認識

仮名	日本人	ビルマ人	ミャンマー人	特定の民族	ミャンマー系日本人
B	どちらとも	多少感じる	回答なし	回答なし	回答なし
E	多少感じる	多少感じる	多少感じる	多少感じる	回答なし
G	全く感じない	多少感じる	非常に感じる	多少感じる	全く感じない
L	非常に感じる	あまり感じない	回答なし	あまり感じない	回答なし

※表中の「どちらとも」はアンケート設問における「どちらとも言えない」を指す。

筆者作成（アンケート調査結果より）

例えば, 10 代後半で来日し 30 年以上滞日している G は,「ミャンマー人」を「非常に感じる」と回答する一方,「日本人」と「ミャンマー系日本人」には「全く感じない」とし，日本人意識を明確に否定している。これに対し, 10 歳未満で来日し滞日歴 20 年弱の L は「日本人」を「非常に感じる」と回答し，出自に関わるカテゴリーへの意識的な距離を保つ姿勢がみられた。

また E は「ミャンマー系日本人」以外のカテゴリー全てに「多少感じる」と回答しつつ,「『ナニジン』ってそんなに重要なのかと思う」と回答し，国籍や民族による分類そのものへの違和感を示した。インタビューにおいても「みんな地球人だって事は忘れないでほしい」と語り, 国民国家の枠組みを相対化するトランスナショナルな自己認識が確認できた [(3)]。

(3) 社会経験

次に社会経験では，多くの 2 世および 1.5 世が学校生活や地域社会において差別や外国人扱いといった否定的経験を有していることが明らかになった。これらは，当事者が自身を「日本人」と認識しようとしても，日本社会からは「外国人」として線引きされるという経験である。

まず 2 世では，名前や外見といった可視的特徴に基づき，日本語能力や生活実態とは無関係に「外国人」として分類されてしまうという経験を有することが特徴的である。ある回答者は, アンケート設問のカタカナでの「ナニジン」表記について,「配慮しているようで, 差別的であると感じた」と指摘し,「名前がカタカナだと日本でずっと育っていても，初対面で留学生や技能実習生と同じ扱いを受ける」と述べている。これは，可視化された属性に基づくカテゴリー化が，当事者の言語能力や生活実態を無視して行われていることへの違和感を示している。また A もインタビューで,「漢字の日本名があったことが救いだった」

と語り，名前の表記が日本社会への適応や受け止められ方を左右する社会的資源であることが確認できる。

1.5世については，在留資格や職場における慣行に関する回答がみられた。ある回答者はアルバイト面接時に在留資格を理由に採用を断られたと記述しており，制度上の属性が日本社会への経済的・社会的アクセスを制限する障壁となる現実を示している。またGはインタビューで，職場での意思決定の曖昧さに疑問を抱きつつも，「日本人のやり方」だと理解しようとすると語っている(4)。

これらの経験自体は，必ずしも1.5世に固有のものではないが，1.5世の場合はミャンマーと日本の双方で社会経験を有し，それらを資源として活用できる一方で，自己の立ち位置がいずれの社会にも完全には位置付けられないというジレンマがある。Gはインタビューの中で，1.5世について「途中で日本に来た人とか，2世の人が，ちょっと曖昧とか，どっちつかず的に思われる微妙なところなのかな」と述べ，この語りからは，1.5世が自らを中間的な位置にある存在として捉えていることがうかがえる。この点で線引きを自明のものとして受け入れる1世や，日本人としての自己認識との齟齬がある2世とは異なる形で，違和感や内省として表れ，「日本人」と「外国人」の間に見えない境界線が引かれていることを示している。

本項の分析から，ミャンマー人2世および1.5世のアイデンティティは，内的な多層性と外部規定との緊張関係の中で形成されていると言える。内的な多層性とは，日本での生活基盤に裏づけられた日本への親近感と，出自への情緒的な結びつきが併存している状態であり，2世の「ミャンマー系日本人」志向や1.5世のトランスナショナルな自己定義を支える基盤となっている。

外部規定とは，カタカナ名や在留資格といった「外国人」を指し示す可視化された属性が，当事者の多層的な自己認識を考慮することなく，差別や排除を生み出していることである。日本社会におけるこの両者のせめぎ合いは，2世および1.5世にとってアイデンティティ形成の重要な契機となる。この過程で，自らを「ミャンマー系日本人」というカテゴリーで捉えたり，国境の枠組みそのものを相対化しトランスナショナルな視点を確立することで，自己規定はより能動的なものになる。

4. 小括

本章の分析から，定住ミャンマー人 2 世および 1.5 世のアイデンティティ形成は，以下の 3 点に要約できる。

第 1 に，両世代は高い日本語能力と日本文化への強い親近感を共有しており，「日本への親近感」は世代を問わず安定したアイデンティティの基盤となっている（12 名中 11 名が流暢と回答）。ただし，日本語を介した社会との繋がりには世代特有の違いがある。2 世は日本語を第一言語として育ち，生活領域において日本社会へ言語的に途切れることなくアクセスできる。一方で，1.5 世は日本語能力が高いものの，それが後天的に習得した言語であるという自覚や，使用場面で「外国人」としての外部規定に直面しやすく，日本社会との境界線に対してより敏感である。

第 2 に，「出自へのこだわり」は世代によってその基盤と方向性が異なる。1.5 世は，高度なミャンマー語や民族語の能力を維持し，国民国家レベルの出自意識を比較的堅固に保つ一方で，母国の社会や政治の状況と向き合う中で宗教観や価値観の再構築を迫られ，同化志向や個人志向，トランスナショナルな視点など，多様な志向へと分岐している。これに対し，2 世はミャンマー語の継承が困難である分，民族語や宗教行事，第三言語の習得などを通じて，家族や民族コミュニティのレベルで出自を再構成する傾向が強い。これは，世代を下るにつれて，出自へのこだわりが国民国家的な枠組みから日常的な生活世界に根ざした実践へと再編成されていることを示唆する。

第 3 に，2 世と 1.5 世の複合的な自己認識は，いずれも日本社会からの「外国人」としての外部規定と常に緊張関係にあるが，その受け止め方には世代差がある。2 世では，日本語を第一言語とし日本社会に深く統合されているにもかかわらず，名前や外見といった可視化された属性による一方的な線引きを経験し，その違和感や抗いが，自らを「ミャンマー系日本人」と能動的に名乗る可能性へとつながっている。他方 1.5 世では，ミャンマーと日本の双方での生活経験を背景に，日本文化への理解を一定程度有しながらも，このような線引きに直面すると，それを自明のものとして受容する 1 世とも，日本人としての自己認識との齟齬を有する 2 世とも異なる形で違和感を経験する。こうした葛藤は，国民国家レベルの出自意識を強める方向と，「地球人」といったトランスナショナルな自己規定へ向かう方向へと分岐する。外部規定への対応というプロセスは共通するが，その具体的な表れ方には世代差が確認できる。

以上の検討を踏まえ，次節では1世のアンケートおよびインタビュー調査結果を加え，1世・1.5世・2世という3世代の比較を通じて，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」の連続性と変容，そして「ミャンマー系日本人」概念の再検討を行う。

V. アイデンティティ形成の世代間比較

本節では，1世へのアンケートおよびインタビュー調査をもとに，先行研究で提示した1世のアイデンティティ類型（民族志向・同化志向・共生志向・個人志向）を実態に即して再検討する。その上で，第2節で明らかにした2世および1.5世の特徴をこの類型軸上に位置づけ，3世代の比較を通じて，アイデンティティ形成における連続性と変容を明らかにする。

1. 1世のアイデンティティ形成の特徴：先行研究の基盤と実態の確認

本項では，1世5名のアンケート回答とOさんへのインタビュー内容を総合的に分析し，1世のアイデンティティ形成の特徴を整理する（以下敬称略）。

(1) 言語能力

言語能力では，生活言語としての日本語とルーツを示す母語の併用が確認できた。アンケート回答者5名のうち，日本語能力が「流暢」が1名，「複雑な内容でもできる」が3名，「日常レベル」が1名で，多くが日本語を「仕事上の主要言語」として使用している。来日時期が成人後であったことから，生活の安定と環境への適応のために日本語習得が不可欠であったことがうかがえる。

一方，母語維持の困難さも指摘された。Oは，日本語について「長く暮らすうちに自然と身に付いた」と述べる一方で，「ビルマ語は使わないと忘れる」と語り[(5)]，日本語が生活に欠かせない機能的な言語であるのに対し，母語は意識的な使用を要する言語として位置づけられている。この二面性は，日本語優位の社会環境において母語使用の場が限られることに起因する。母語維持が個人とコミュニティの努力に委ねられている点は，1世が出自に関わる言語実践を継続する上での課題となっている。

(2) 文化的な実践

文化的な実践に関して，アンケートでは宗教および食生活について尋ねた。1世5名のうち4名が仏教徒と回答し，寺院や宗教行事への参加を通じてミャンマー人コミュニティ

とのつながりを維持している。この実践は，宗教的意味にとどまらず，社会的ネットワークを維持する重要な役割を果たしている。

O の語りからは，文化的実践が日常生活に深く根付いた習慣として機能していることが確認できる。O は仏教徒として，日本にあるミャンマー寺院に通うことが欠かせない習慣となり，食文化についても「作る料理はほとんどミャンマーの味」と述べている。宗教や食生活を通じた出自文化の保持は，単なる故郷の記憶ではなく，日本の生活を支える実践的な基盤となっている。

(3) 自己認識とアイデンティティ類型

自己認識では，日本社会への帰属意識と故地とのつながりが併存する多様な姿がみられた。表 5 は，1 世の自己認識をまとめたものである。

表 5　1 世の自己認識

仮名	日本人	ビルマ人	ミャンマー人	特定の民族	ミャンマー系日本人
I	全く感じない	非常に感じる	非常に感じる	多少感じる	回答なし
J	非常に感じる	非常に感じる	非常に感じる	多少感じる	多少感じる
N	多少感じる	非常に感じる	非常に感じる	非常に感じる	多少感じる
0	回答なし	回答なし	非常に感じる	非常に感じる	回答なし
P	どちらとも	どちらとも	どちらとも	回答なし	回答なし

※表中の「どちらとも」はアンケート設問における「どちらとも言えない」を指す。

筆者作成（アンケート調査結果より）

I は，日本人性を否定しつつ出自アイデンティティを強く保持する民族志向の典型である。J は，日本人・ビルマ人・ミャンマー人をすべて肯定し，共生志向を最も明確に示している。N も民族志向が強いが，「ミャンマー系日本人」を「多少感じる」と回答し，日本社会との関わりを部分的に取り込む姿勢がみられる。P は「どちらとも言えない」という回答から，両文化のあいだで揺れ動く中間的なアイデンティティの状態を示している。

O は，日本国籍を有しているが，アンケートの日本人・ビルマ人の項目を未回答とし，「ミャンマー人」と「特定の民族」のみを強く肯定している。この回答からは，日本社会への帰属意識の表明に慎重でありながら，出自アイデンティティを核に据える姿勢がうかがえる。これは日本社会への帰属を否定しているというより，日本国籍という法的属性と周囲から

受ける「外国人」としての扱いの狭間で表明を控えている状態に近い。インタビューでOは，東南アジア系の外見ゆえに「日本人」だと名乗れば不審に思われるとの懸念を語っており，周囲への配慮が自己認識の表明を控える要因となっている。

また，JやNのように，「日本人」「ミャンマー人」を肯定しつつ「ミャンマー系日本人」を「多少感じる」と限定的な肯定にとどめる回答からは，複数の自己認識を1つに統合するのではなく，状況に応じて併存させる姿勢がうかがえる。

(4) 社会的経験

社会的経験に目を向けると，1世は生活拠点を日本に置きながら，祖国との心情的なつながりを独自の形で保持している。来日から約4半世紀が経過したOは，生活の利便性や環境に深く適応しており，将来の生活拠点として日本を挙げている。しかし，その定住意識は母国との断絶を意味するものではない。ミャンマーに戻っても「お客さんのようになる」と感じ，現地の生活習慣と乖離がある一方で，「(2) 文化的な実践」で確認した通り，精神面や生活様式の根幹では出自文化を維持している。また，Jは「将来日本人になりたい」と回答し，日本社会への帰属意識を明確に示している。

以上より，1世のアイデンティティ形成では，出自へのこだわりを維持しつつ，日本社会での生活と両立させようとする共生志向が強いと言える。Oの事例は，強い出自意識を維持しながら将来の生活の場として日本を選択している点で，出自と定住先を切り分けて併存させるあり方が成立することを示している。

2. 世代間比較と「ミャンマー系日本人」概念の変容

本項では，前項で確認した1世と，第Ⅱ節で検討した2世および1.5世の特徴を統合し，3世代におけるアイデンティティ形成の連続性と分岐を明らかにする。

まず連続性として，すべての世代に共通するのは，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」を二者択一ではなく共存させようとする志向である。これは，1世の「共生志向」を基盤としつつ，世代を下るにつれて生活上の実践と自己認識との関係をより能動的に選択する方向へと変化している。

1世は，「出自へのこだわり」を基盤とする心情的な自己認識と，「日本への親近感」に支えられた生活上の実践的選択とを区別して捉えることで，両者の共存を成立させている。Oは，日本社会を生活の基盤としている一方で，自己認識においてはミャンマー人および特定の民族としての出自を重視しており，法的属性と自己認識とが必ずしも一致しない「切

り分け型」の事例である。N は,「日本人」を「多少感じる」としながら,「ビルマ人」,「ミャンマー人」,「特定の民族」を強く肯定し，出自を優位に保ちつつ日本社会への関わりを部分的に取り込む姿勢を示す。J は,「日本人」,「ビルマ人」,「ミャンマー人」をいずれも肯定し，出自と定住国の双方を高いレベルで併存させる共生志向を体現している。

さらに，一部の 1 世は,「ミャンマー系日本人」を自己認識の選択肢として挙げた。認識の程度は「多少感じる」に留まるが，日本生活の長期化や日本国籍取得の進行を背景に，出自と日本社会への帰属を 1 つの枠組みで捉えようとする志向がみい出せる。このような「ミャンマー系日本人」志向は，日本人としての帰属とミャンマー人としての出自が併存しているという前提に立ち，当事者自身が能動的に再構成しようとする動きと捉えることができる。

ミャンマーでの原体験をもつ 1.5 世は，国民国家レベルの出自意識を強く保持しつつも，日本社会での生活を経て，自己認識が分岐するようになる。G は信仰や価値観を再構築しつつも「ミャンマー人」としての意識を非常に強く維持し，民族志向が顕著である。これに対し E は,「ミャンマー系日本人」以外の項目を「多少感じる」と回答し,「『ナニジン』ってそんなに重要なのか」と述べ, 国民国家の枠組みを相対化する個人志向を示す。L は「日本人」に対する強い肯定と，出自に対する保留を通じて同化志向へ向かっている。このように 1.5 世は，複数の志向が混在する移行期的な世代である。

日本語を第一言語とし，日本の教育制度に深く統合されている 2 世では，半数が「ミャンマー系日本人」という複合的カテゴリーを能動的に選択している。一方で,「日本人」「ミャンマー人」という複数の自己認識を独立させたまま併存させ,「ミャンマー系日本人」を選択しない非融合型もみられる。このことは，2 世において共存のあり方がさらに多様化していることを意味する。

3. 「出自へのこだわり」と「日本への親近感」の変容

前項までの比較を踏まえ，本項ではアイデンティティ形成を規定する 2 軸「出自へのこだわり」と「日本への親近感」が 3 世代間でどのように変容しているかという点を考察する。

第 1 に,「出自へのこだわり」は世代が下るにつれ，国民国家の枠組みから，よりローカルで実用的な側面へと変容している。1 世はミャンマー語や民族語，ミャンマーという国民国家への帰属を基盤としつつ，宗教や食文化といった文化的な習慣を自己の拠り所として意識的に保ち続けている。1.5 世は，ミャンマーでの原体験を背景に高いミャンマー語・

民族語能力を維持しながらも，内省や相対化を通じて国民国家の枠組みそのものを再検討する移行期に位置している。その結果，民族志向のみならず，同化志向や個人志向へと分岐し，出自への意識の流動化が確認できる。

これに対し2世では，国民国家レベルの出自を象徴するミャンマー語の継承が構造的に困難である一方，家庭内で使用される親の出自に関わる言語や，宗教・伝統行事といった日常的かつローカルな文化実践が出自意識を再構築する重要な資源となっている。今回の調査において，2世8名のうち3名の民族語能力がミャンマー語よりも優位で保持され，自己認識において特定の民族としての意識を肯定する回答が半数に上った。これは，2世のアイデンティティ実践において，親の出自言語といった具体的で地域的な要素，さらに宗教や伝統行事などローカルな文化実践が，出自意識を再構築する重要な資源となることを示している。

筆者は約4半世紀の日本滞在を経た少数民族1世が「○○民族」としての意識を根底に持ちつつも「在日ビルマ人」という新たな認識を重層的に獲得していく過程を指摘した［梶村 2016］。今回の調査結果は，このような自己認識の重層性が，再編成を伴いながら2世に継承されていることを示唆している。3世代を通じたこの変容は，出自の拠り所が，親世代の国民国家的な枠組みから，当事者の日常生活に根ざした家族・民族・コミュニティレベルの文化実践へと移行していく過程として位置づけることができ，「ミャンマー系（ビルマ系）日本人」の誕生過程とも整合する［梶村 2018b］。

第2に，「日本への親近感」の深化と自己認識への影響が，世代ごとに異なる形で現れている。1世にとって，日本語は習得言語であり，日本文化の実践は生活を支えるための機能的側面が強い。文化の使い分けは，出自意識を保つため意識的に行われ，民族志向や共生志向といった自己認識が形成されている。

1.5世は，日本語を習得言語としながらも高い運用能力を有し，日本文化への親近感も強いが，ミャンマーでの原体験を有することから両文化への心情的葛藤を抱えやすい。民族志向を強く保持する傾向がみられる一方で，同化志向や個人志向へと展開する傾向も確認でき，自己規定の模索が進んでいる。このように1.5世は，出自の保持と日本社会への適応のあいだで，自己の立ち位置を探り続ける世代で，その過程で多様な方向へ展開しうるという特徴を持つ。

2世は，日本語を第一言語としており，日本文化の実践が生活に深く根ざし，日本への親近感は揺るがない。その一方で，線引きは主にカタカナ名や外見といった可視的特徴に

集中する。この線引きに対する違和感や反発が，「ミャンマー系日本人」という複合的カテゴリーの能動的な名乗りや，多層的で非融合的な自己認識へとつながっている。これらの変容は，画一的な「外国人」の枠組みに収まらず，状況に応じて自己を定義し直す多層的かつ状況依存的なアイデンティティ形成のあり方を示している。

VI. おわりに

本稿では，日本社会に定住するミャンマー人 1 世･1.5 世･2 世を対象に実施したアンケート調査（および一部インタビュー）をもとに，アイデンティティ形成の特徴を比較し，「出自へのこだわり」と「日本への親近感」という 2 軸から世代間の連続性と変容を検討してきた。本稿の分析から以下の 3 点が明らかになった。

第 1 に，3 世代に共通する「日本への親近感」という安定した基盤が確認できた。1 世は生活の安定や社会適応のために日本語や日本文化を受容し，1.5 世は教育・就労を通じて，2 世は日本語を第一言語として，日本社会との結びつきを確立していた。差別経験や制度的制約が存在しても，日本社会を生活の中心とする志向は強く維持されていた。さらに本稿では，この「日本への親近感」を前提とした共存志向が，世代を下るにつれて生活面と心情面を切り分ける 1 世のあり方から，自己認識を能動的に選択する 2 世のあり方へと変化していることを示した。

第 2 に，「出自へのこだわり」の拠り所とそのあり方は，世代が下るにつれて変化していた。1 世は，ミャンマーという国民国家および民族集団との関係を比較的明確に保持し，宗教・母語・食文化などの継続的な実践を通じて出自を確認していた。1.5 世は，ミャンマーでの原体験と日本での生活経験が併存することで，出自へのこだわりが多方向に分岐し，同化志向や個人志向を含む多様なあり方がみられた。2 世では，ミャンマー語の維持が困難である一方で，民族語や親族ネットワークなど，家族単位の文化的実践を通じて出自が再構成されていた。出自の拠り所は国民国家レベルから，日常生活に根ざした家族･民族･コミュニティレベルへと移行している。特に，2 世の中には国家意識よりも家庭内の言語や習慣に根ざした特定の民族としての自己認識が鮮明な傾向が確認できた。これは，本稿の重要な知見として，1 世が有していた重層的な自己認識が，2 世の日常生活においてより実感を伴う具体的なエスニック・アイデンティティへと再編・継承されていることを示している。

第 3 に，外部からの線引きへの対応として，複合的な自己認識が生じていた。学校や職

場での差別的経験や，名前・外見に基づく「外国人」としての扱いは，3世代に共通して報告された。特に日本語を第一言語とする2世にとって，この線引きは自己認識との齟齬として意識されやすい。それに対し，2世を中心に「ミャンマー系日本人」という複合的カテゴリーを能動的に選び取る（名乗る）動きが確認された。また1.5世においても，外部からのまなざしに対して，複数のアイデンティティを併置したり，状況に応じて選択的に使い分けたりする姿がみられた。さらに1世の一部でも，低いレベルながら「ミャンマー系日本人」を自己認識として選択する回答が確認でき，複合的な名乗りは世代を超えて広がりつつあることが示唆される。

以上のことから，定住ミャンマー人のアイデンティティは，「日本人／外国人」や「ミャンマー人」といった国民国家を基盤とする単線的な帰属カテゴリーでは捉えられない，流動的で重層的なものであることがわかる。

本稿は「誰を日本人とみなすのか」という境界が，他者による「名付け」ではなく，当事者による「名乗り」を通じて形成されることを示し，今後の移民第2世代研究の基礎的知見を提供するものである。

謝辞

本稿の作成にあたり，多忙の中アンケートにご協力いただいた皆様，および貴重な時間を割いて詳細なインタビューに応じてくださった皆様に心より感謝申し上げます。ここに記して深く感謝の意を表します。

注

(1) 本稿で用いる「ビルマ」と「ミャンマー」について説明しておく。1989年に国名が「ビルマ」から「ミャンマー」へ変更されたが，国民の同意のないまま強行されたという経緯から，現在も年配層や軍政に批判的な人々は旧称「ビルマ」を使用する。また「ビルマ民族（バマー）」は国内主要民族を指す語であり，国名と民族名が重なるという複雑な状況がある。したがって，「ビルマ」は国名の旧称・主要民族名の双方を含意し，「ミャンマー」は現行の国名として用いられている。

(2) 2024年9月16日，Aさんへのインタビューより。

(3) 2024年10月6日，Eさんへのインタビューより。

(4) 2024年10月9日，Gさんへのインタビューより。

(5)　2024 年 10 月 9 日，O さんへのインタビューより。

参考文献

Berry, John W. 1997. “Immigration, Acculturation, and Adaptation.” Applied Psychology: An International Review 46(1): 5-34. https://iaap-journals.onlinelibrary.wiley.com/doi/abs/10.1111/j.1464-0597.1997.tb01087.x

梶村美紀．2014.「日本定住ビルマ人のネットワーク形成過程：少数民族グループとビルマ民族の連帯を事例に」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』(11): 17-23.

---．2016.「定住ビルマ人の来日前の経歴と民族意識の形成に関する考察」『東アジア研究』: 1-15.

---．2018a.『「ビルマ系日本人」誕生とそのエスニシティ』風響社 .

---．2018b.「日本定住ビルマ人のアイデンティティ形成に関する一考察」『東アジア研究』(68): 1-14.

---．2020.「『ビルマ系日本人』誕生の萌芽 - 日本定住ビルマ人のアイデンティティ -」根本敬編．2020.『在外ビルマ（ミャンマー）人の移動と土着化』4-23．上智大学アジア文化研究所 .

駒井洋 監修・佐々木 てる 編著．2016.『マルチ・エスニック・ジャパニーズ―〇〇系日本人の変革力』明石書店 .

佐々木てる．2006.「コリア系日本人のアイデンティティに関する理念型的把握」『日本の国籍制度とコリア系日本人』107-130．明石書店 .

清水睦美ほか（編著）．2021.『日本社会の移民第二世代―エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店 .

総務省統計局．2025.「在留外国人統計」2025 年 11 月 16 日アクセス．https://www.e-stat.go.jp/stat-search/search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20240&month=12040606&tclass1=000001060399&tclass2val=0.